



歴史研修（その6）

2015年4月16日(木)～17日(金)



開通したばかりの北陸新幹線で金沢へ向かいました

丸岡城にて

加賀・越前の城めぐり

開通間もない北陸新幹線を利用し、北陸で開催された歴史研修。初日は前田利家が本格的な城作りを始めた金沢城や吉崎御坊を訪れ、芦原温泉に宿泊。二日目は丸岡城と一乗谷朝倉館社、織田剣神社を見学しました

天正11(1583)年、前田利家の入城後、本格的な城づくりが始められた金沢城。一行は石川門から



石川門の内側、なまこ壁に隠し鉄砲狭間

金沢城

静岡大学名誉教授
解説 小和田 哲男さん



金沢城について解説をしてくださる小和田先生

ら入城、門の内側は枡形となって味方が周りを囲み、敵が入ってきたときに四方から弓や鉄砲で射ることのできるようになっていきます。雪国ならではの工夫として瓦にしみ込んだ水が凍り、瓦が割れるのを避けるために、瓦の上から鉛板を打っています。いざというときは鉛を溶かして鉄砲の弾にもしていました。

金沢城の石垣

金沢城を訪れた際にぜひ楽しんでほしいのが、多種多様な石垣です。特に玉泉院丸庭園にある色紙短冊積石垣はその名の通り、色紙形の石がきれいに積みまれています。滝口には黒色の坪野石でV字形の石樋をしつらえるなど、全国でもここにしかない珍しいつくりとなっています。



正方形や長方形型の石が積まれた、色紙短冊積石垣

他にも金沢城の石垣は、形状や色彩など外観の意匠に趣向をこらしたものが多く、「見せる石垣」として、庭園の景色に彩りを添えています。



切込み接ぎ(右)
石川門の打込み接ぎ(左)

吉崎御坊

1488年、加賀の守護・富樫政親が一向一揆により討たれ、それ以降は加賀の国全体が本願寺門徒の支配下に置かれ、民衆が支配権を握るといふ全国的にも珍しい状況が約100年にわたります。その礎を築いたのが蓮如上人です。吉崎御坊はその蓮

如上人の寺があった場所です。蓮如上人は浄土真宗の北陸で布教に成功し、それが加賀一向一揆や越前一向一揆の大元になっていきました。信長が苦しめられた一向一揆の最初の拠点がこの辺りにありました。今は何も無いのですが、山の上の方が御坊のあった場所です。



蓮如上人御坊跡。本願寺門徒が加賀を支配したことから、「門徒持ちの国」「百姓持ちの国」と言われている

丸岡城

丸岡城は、現在日本にある12の現存天守のうち、最古のものとされています。望楼型の天守を持つ平山城で、戦国大名・朝倉氏が約100年にわたり支配していました。

朝倉氏が滅んだ後、一向一揆の備えとして城主を任されたのは柴田勝家の甥の勝豊。その後、徳川家

の譜代大名でもある本多氏、有馬氏の居城となりました



外観は下見板張り(上が白漆喰、下が板張り)の二重構造になっている。全国でも珍しい石瓦を持つ城でもある

丸岡城と「日本一短い手紙」

旧丸岡町(坂井市)は、ベストセラーになった「日本一短い手紙」と深いつながりがあります。天正3(1575)年の長篠設楽原の戦いの際に、徳川家康の忠臣で有名な本多重次が陣中から妻に宛て「一筆啓上 火の用心 お仙泣かすな 馬肥やせ」という手紙を送ります。火事には気を付けて、お仙をあまり泣かせるとなよ、馬にたくさん食べ物を与えて肥やしておけよ、と書いています。お仙のこと、息子・成重は後に丸岡城の城主となりました。「日本一短い手紙」の「一筆啓上賞」はこの手紙をヒントにしたもので、所縁のある場所なのです。

一乗谷朝倉館址

有力な大名家として、越前国(現在の福井県北部)を治めていた朝倉氏。初代孝景が定めた『朝倉孝景条々』によると、家臣たちに一乗谷への移住を命じるものや、高価な名刀を一本持つのではなく、安い槍を100本用意するなど合理的な教えが書かれています。また、世襲ではなく能力と忠義による人材登用も勧められており、当時としてはかなり先進的な考え方を持っていたとされています。

越前の国主として盤石の地位を築いた朝倉氏が治めた一乗谷は戦乱の世の中でありながら、平和を保っていました。そのため京都から公家や学者、医者、僧侶など、文化人が訪れ、華やかな文化が根付きました。栄華を誇った朝倉氏でしたが、五代義景の時に、刀根坂の戦いで織田信長に大敗。「第二の京都」と呼ばれた一乗谷は信長の軍勢により火が放たれ、1000年の歴史に幕を閉じました。昭和42(1967)年から遺跡の発掘調査が開始され、現在は国の三重指定(特別史跡・特別名勝、重要文化財)となっています。



朝倉義景の菩提を弔うため、館跡に建てられた松雲院唐門。門内の上部には朝倉家の「三ツ木瓜」の紋と豊臣家の「五三の桐」が刻まれている

朝倉氏を支えた武将・朝倉宗滴

朝倉宗滴は四代にわたって、朝倉氏に仕えた戦が得意な武将です。その宗滴が話した言葉が残っています。「巧者の大将と申すは、一度大事の後れに合ひたるを申すべく候。我々は二世の間、勝合戦ばかりにて、ついにおくれに合わず候間、年寄候えども巧者にてあるまじく候」。これは「名将と言えりのは一度大敗した者を言う。自分は一生勝ち放しできたため、年をとったけれどどうとう名将にはなれなかった」という意味です。無敗にも関わらず、本人は謙虚な性格だったようで、現代的に見ても含蓄のある言葉を残しています。

織田劍神社

今回の最後の見学地になる織田劍神社。古くは織田荘という荘園があった地域で、織田劍神社の神官かつ織田荘の荘官が織田氏の始まりだと言われています。

資料館に残されている古文書「織田劍神社文書(複製)」には、藤原姓で書かれている文書があります。織田家は信長の頃から平氏を名乗っています。当時の一般的な考え方に源平交代思想があります。平氏・源氏・平氏・源氏と交代で政権を握るといふ考えです。そのため信長は源氏である足利尊氏にかわって天下を取ると意識し始めたころから、藤原ではなく平氏に乗り換えて偽系図をつくったと言われています。織田劍神社には、織田氏がもと藤原を名乗っていた痕跡が残っています。



劍神社を中心とした地域が織田一族の発祥地。それを示す大きな石碑が建立されている